

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（一般研究）

研究代表者 所属・職名 学校教育学系 准教授

氏 名 河野麻沙美

研究期間 令和 2. 3 年度

研究プロジェクトの名称	「学習科学に基づくデザイン研究を用いた新たな教育の創出 —学校におけるハイブリッド型授業の実践と評価—」
研究プロジェクトの概要	本研究の目的は、教室での対面授業と ICT を活用した遠隔授業を融合させたハイブリッド型授業における協働的な学びを実現する実践の創出とその評価を行うことを目的としたものであった。こうした社会的背景を研究動機に、『知識創造』を学習の認識論的立場とし、協働的な知識構築とともに学習過程の追跡可能なソフトウェア（Knowledge Forum）を使用して授業デザインをし、その授業過程の定性的・定量的分析を行った。また、デザイン研究の展開を基盤にした授業デザインの過程を記述・考察し、ICT を活用した協働的な学習での授業デザインの課題を明らかにした。
研究 成 果 の 概 要 ※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。	<p>本研究での実践を分析した結果、学習者の知識創造を可視化する授業デザインの構成や知識創造に参画する学習者の協調学習への参加が捉えられなかった。その背景に、協働学習の目的や位置づけ、学習成果の捉え方が従来の考え方とは異なること、学習の認知的側面、内的表象の形成といった学習観や協働の成果をその表象に捉える認識論の違いを共有・理解しながらも授業デザインや指導行為に反映できなかったことがあげられる。</p> <p>知識創造を認識論的立場とする学習では、個々の内的過程を軽視するのではなく、それを基盤として協働する学習コミュニティの中で自ら知を生み出していくことを求め、学習をデザインする。学習者の主体性や協働だけでは、個々の概念理解やより深い理解に必ずしも到達するわけではないという課題に基づくもので、21 世紀の学びのありかたとして進展したものであるといえる。現在の、多くの実践では、学習者の主体性重視と他者との対話や共同作業といった協働的活動の多用は独立して強調される。</p> <p>ICT 活用によって、個々の認知過程は格段に外化・把握が容易になった一方で多くの協働的な学びがこうした認知過程の協調による知識創造を志向したり、目指しているとは言い難い。個々の学習への還元を当然とみなし、同じ場所に参集することを授業とみなしていた学校教育において、ポストコロナにおいては協働的な学習の目的を再考し、認識論を転回することがハイブリッド型学習の授業デザインの基盤になると考える。</p>
研究 成 果 の 発 表 状 況	特になし
学校現場や授業への研究成果の還元について	本実践の成果と Knowledge Forum の活用にもつれた実践の推進に加えて、「知識創造」の認識論に立った協働・探究の授業づくり、学習のみとりについて、授業研究や校内研修へ参画を通して取り組んでいる。

【提出期限】 令和 4 年 3 月 31 日（木）：厳守